

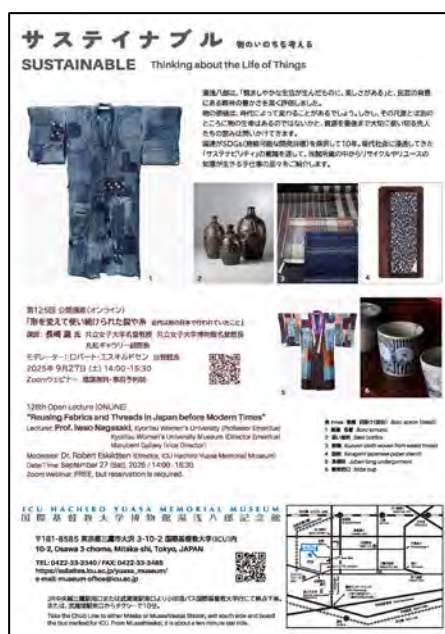
2025 年 9 月 5 日

報道関係者各位

計 5 枚

国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 特別展「サステイナブル 物のいのちを考える」のご案内

国際基督教大学（ICU：東京都三鷹市、学長：岩切正一郎）の博物館である湯浅八郎記念館は、2025 年 9 月 9 日（火）から 11 月 7 日（金）まで、以下の通り、**特別展「サステイナブル 物のいのちを考える」**を開催いたします。ご案内にお力添えをいただけますよう、お願い申し上げます。



湯浅八郎記念館より

破れやほつれの上から幾層にも継ぎを当てた着物。酷使に耐えるよう刺し縫いで補強した仕事着。擦り切れた木綿を細く裂き、再び布に織り直した帯。機仕事で出る屑糸をつないで織り上げた反物。数多の古裂を接ぎ合わせて仕立てた襦袢。いずれも小さな布一枚、短い糸一本無駄にしない、つましい暮らしを語る当館の収蔵品です。

こうした徹底したリサイクルやリユースのための手間と工夫は、大量生産が浸透する前まで日々のあらゆる面で発揮されていました。念入りの補修の跡が残る菓子木型や染型紙からは、職人が道具類のメンテナンスを自ら手掛け大切に取り扱っていたことが見て取れます。木工品の産地で木粉の副産物として考案された練物の人形や、反故和紙が出る城下町を中心に生まれた張子など、廃棄する材料を用いて再生させた名産品の例もあります。酒屋が貸し出す通い徳利は別名を貧乏徳利ともいい、皆マイボトルさながら店に持参し、量り売りで酒や醤油を購入しました。欠けた器を漆で接着して直す金継ぎは、もはや修理の域を越え、物に新たな趣を加えるクリエイティブな行為にまで発展しました。近年では、繕を重ね何世代にもわたり着回した襦袢が、海外の美術愛好家の間で BORO として脚光を浴びています。一方で、端裂には古来より人知の及ばない力が宿ると信じられ、布を寄せ集め継ぎ合わせて仕立てた着物に、幼子の幸せを託す風習が日本各地にありました。

古手や残糸という有り合わせの制約の中で期せずして生まれたものが宿している、得も言われぬ魅力はどこから来るのでしょうか。湯浅八郎は「慎ましやかな生活が生んだものに、美しさがある驚き」*と、自らの愛蔵品のひとつである屑織の誕生した背景にある精神の豊かさを高く評価しています。物の価値は時代に

よって変わることがあるでしょう。しかしその尺度とは別のところに物の生命はあるのではないかと、資源を最後まで大切に使い切る先人たちの営みは問いかけてきます。

ノーベル賞をきっかけに環境問題を語る上での国際的な旗印の言葉となった「もったいない」の伝統のとおり、物を愛しみ長く使い続けることを美德とした日本でも、「小豆 三粒包める布は捨てるな」と、切端を集め再利用していたかつての時代は遠いものとなりました。生産の場から遠く隔たれ、消費に明け暮れるばかりの現代の生活では、手ずから物を作るところか、もはや直し 繕う機会もほとんど失われていると言えるでしょう。使い捨てを前提とする市場は、大企業に富をもたらす一方で搾取を恒常化し、ゴミを増やし資源を浪費するなど環境に膨大な負荷をかけることから、世界では昨今、電気電子機器や車や家具を中心に、消費者が購入品を長く使い続けるための「修理する権利」が主張される事態ともなっています。

国連が SDGs（持続可能な開発目標）を採択して 10 年。物の寿命をまっとうさせることに心を砕いた人々の手仕事を紹介する本展が、「サステナビリティ」の意識をさらに醸成するきっかけとなれば幸いです。

*湯浅八郎『民藝の心（新装和英版）』110 ページ（教文館、2023 年刊）

展覧会名：特別展「サステナブル 物のいのちを考える」

SUSTAINABLE —Thinking about the Life of Things

会場：湯浅八郎記念館 2 階 特別展示室

会期：2025 年 9 月 9 日（火）～11 月 7 日（金）

開館日時：9/23（祝）、10/14（火）を除く毎週火～金曜日と

9/21（日）、10/12（日）、10/13（月・祝）のいずれも 13：00～17：00

休館日：祝日を含む土～月曜日と、9/23（火・祝）、10/14（火）

入館料：無料

展示資料：湯浅八郎記念館所蔵品約 100 点

染織品（襦袢 長着、寄袷 襦袢、刺子 仕事着、屑 織 反物、百 徳 着物、七条 袷 袴 ほか）

陶磁器（通い 徳利、金継ぎ 蕎麦 猪口）

紙工品（染 型紙、張子、石版画）

木工品（菓子木型、練物 人形）

交通：JR 中央線三鷹駅および武蔵境駅より小田急バス「国際基督教大学行」終点下車

または武蔵境駅南口よりタクシー 10 分

関連イベント：

第 125 回公開講座（オンライン）

「形を変えて使い続けられた裂や糸 ―近代以前の日本で行われていたこと」

2025 年 9 月 27 日（土）14：00～15：30

講師：長崎 巖 氏

（共立女子大学名誉教授、共立女子大学博物館名誉館長、丸紅ギャラリー副館長）

モデレーター：ロバート・エスキルドセン（当館館長）

聴講無料・要予約

Zoom ウェビナーにて、湯浅八郎記念館エントランスホールからライブ配信

展示に関する問い合わせ先：国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館

（担当 具嶋恵 ぐしまめぐみ TEL:0422-33-3340 FAX:0422-33-3485 E-mail: gmegumi@icu.ac.jp）

プレスリリース問い合わせ先：国際基督教大学パブリックリレーションズ・オフィス

（担当：森川、吉良 Tel：0422-33-3040 Fax：0422-33-3355 E-mail：pro@icu.ac.jp）

画像データ（カラー）をご入用の場合は、ご遠慮なくお申し付けください。



●^{らんる}襦^{ながぎ} 長着（木綿、藍染め）



●^{らんる}襦 前掛け [部分]（麻、木綿、藍染め他）



●^{くずおり}屑織（木綿、藍染め他）



●^{そばちよく}蕎麦猪口（磁器、金継ぎ）



●刺子袋（木綿、藍染め）



●^{よせぎれ}寄裂^{じゅばん} 襦袢（絹）



●通い徳利（陶器）



●型紙（和紙、柿渋）